菊池寛『マスク』（文春文庫）所収
「マスク」と「忠直卿行状記」を読む

樟　喬太郎

菊池寛は大正期、昭和戦前期を通じて戯曲、小説、随筆と多方面に健筆を振るった作家である。戯曲「父帰る」（大正六〈一九一七〉年）「恩讐の彼方に」（大正八年）は封建的習慣の打破、ヒューマニズムを称揚したものであり、菊池は作家としての地位を確立した。長編小説「真珠夫人」（大正九年六月～十二月『大阪毎日新聞』『東京毎日新聞』）は、男性社会に敢然と立ち向かう女性を主人公としたドラマであるが、これは「通俗小説」のジャンルを確立した記念碑的作品である。

一方で菊池は谷崎潤一郎、水上瀧太郎、志賀直哉、佐藤春夫などと並ぶ短編の名手でもある。的確な描写、人間心理の鋭い分析、理詰めの構成などの特色が挙げられる。
今回は菊池の『マスク（スペイン風邪をめぐる小説集）』から、余震の残るオミクロン禍を彷彿とさせる「マスク」と、菊池が得意とする歴史ものの代表作「忠直卿行状記」を取り上げました。

一、「マスク」（大正九年七月号『改造』発表）について

あらすじ　　　***今回のコロナ禍を振り返りながら読み進めて行きましょう。**
主人公の「自分」は、「見かけ丈は肥つてゐるので、他人からは非常に頑健に思われながら、その癖内臓が人並以下に脆弱であることは、自分自身が一番よく知って居た。」「心臓と肺とが弱い上に、去年あたりから胃腸を害してしまつた。」（８頁）

去年の暮、胃腸をヒドク壊して医者に見て貰った。幾度も聴診器をあてて、「心臓の弁の併合が不完全」と診断した。私はこれ程までに心臓が弱いとは思ってもみなかった。（１０頁）
医者は興奮してはいけない、チフスや流行感冒に罹って四十度位の熱が三四日続くと危なと忠告を受けた。「こうした診察を受けて以来、生命の安全が刻々に脅かされてゐるような気がした。」（１１頁）
殊に、丁度**去年の暮**から、流行性感冒が、猛烈な勢いで流行りかけて来た。医者の言葉に従えば、自分が流行性感冒に罹ることは、即ち死を意味して居た。」（１１頁）。新聞が毎日、感冒について、心臓の強弱が勝負の分かれ道と言った報道するので恐怖感が益々高まった。
「他人から、臆病と嗤われようが、罹つて死んでは堪らないと思つた」。（１２頁）
「自分は、極力外出しないようにした。妻も女中も、成るべく外出させないようにした。そして朝夕には過酸化水素水で、含嗽をした。」「外出するときは、ガーゼを沢山詰めたマスクを掛けた。」。友人が、高熱を発した報を聞くと二三日は気持ちがわるかった。（１２頁）
「毎日の新聞に出る死亡者数の増減に依つて、自分は一喜一憂した。日毎に増して行つて、

三千三百三十七人まで行くと、それを最高の記録として、僅かばかりであつたが、段々減少し始めたときには、自分はホッとした。が、自重した。」感冒が下火になってきたが主人公は警戒して、**二月一杯**は殆ど外出しなかった。「友人はもとより、妻までが自分の臆病を笑つた。自分も少し神経衰弱の恐病症に罹つて居ると思つた」（１３）。

三月に、入ってから感冒の脅威も段々衰えていった。「自分はまだマスクを捨てなかつた」。伝染の危険を冒すのは野蛮人で、文明人は勇気をもって危険を避けるものだと主人公は確信している。（１３頁）
三月の終頃はもう流行性感冒は下火になったことが新聞記事に出るようになった。もう殆どの人がマスクを付けていなかった。主人公はマスクを捨てなかった。停留場で一人位黒い布切れで、鼻口を覆っている人を見ると、「非常に頼もしい気がした。ある種の同志であり、知己であるような気がした。」（１３頁）「自分が、真の意味の衛生家であり、生命を極度に哀惜する点に於いて一個の文明人と云つたような、誇りさえ感じた。」（１４頁）
四月となり、五月となって、主人公はマスクをやめた。しかし、新聞に感冒がぶり返したと報じられた。「まだ充分に感冒の脅威から、脱け切れないと云ふことが、堪らなく不愉快だつた。」（１４頁）
五月の半ばに市俄古の野球団との野球試合を観戦した時の事である。入り口の近くで主人公を追い越した、二十三四の青年が有った。この青年が黒いマスクをしているのを見た時、主人公は「ある不愉快なショックを受けずには居られなかつた。それと同時に、その男に明らかな憎悪を感じた。」「いやな妖怪的な醜さをさえ感じた」（１５頁）
主人公は不愉快になった理由を次のように述べる。第一、自分がマスクをしているときは、マスクをつける人を見ると嬉しかったが、マスクを取るとマスクをした人を不快に感じた。つまり、「自己本位」な心持である。第二は、「強者に対する弱者の反感」である。「自分が世間や時候の手前、やり兼ねて居ることを、此の青年は勇敢にやつて居るのだと思つた。」。不愉快に感じたのは「此の男のそうした勇気に、圧迫された心持」であった。（１６頁）

スペイン風邪について
此の作品は百年前の「スペイン風邪」（スペイン・インフルエンザ。流行性感冒）に直面した「自分」（＝菊池）の、恐怖感、揺れ動く心理を巧みに描き出したものである。
スペイン風邪は全世界で大流行した。第一次世界大戦中スペインは中立国であり情報が自由に報道された。日本では終息までに二年かかったが、その間に三つの波が襲った。

　　第一波　　大正七年（一九一八）五月から七月まで。
　　第二波　　大正七年十月から大正八年五月頃まで。
　　　　*第二波はウイルスの変異によって致死率が高まり、二十六万六千人の死者がでた。

*菊池「マスク」は執筆時期から考えて、「第二波」を対象としている。

第三波　　大正八年十二月から大正十年五月頃まで。

新聞の報道（記事の中から適宜拾い要点のみ）

「東京で奇妙な風流行」大正七年五月二五日『東京日日』

*三日風邪の猛威として国沢警視庁医務課長の談を掲載。従来の流行性感冒と異なり伝染力が強く、誰かひとり罹るとたちまちその家族が倒れる（一名相撲風と称される）。四十度以上の高熱、頭痛、咳、下痢を起こす。三、四日位で平癒するが、人混みは避けるように。一番困るのは適当な予防策が無いことである。

*「風邪の流行は世界的、日本各地にも蔓延」大正七年十月二十四日『時事新報』

サンフランシスコから帰港中の東洋汽船シベリア丸の船員、乗客中数十名の患者が出た。

*横浜市の小学校はじめ各地で生徒の感染、休校。東京では校医を招集して予防に関して協議することとした。*十月二十六日　鉄道・電話・郵便に支障が出始めた。(時事新報)

*十一月六日、大阪市の死者増え、火葬場が間に合わず。北里研究所で病原菌を見つけ、発表。これに対して教師大学、電研が疑義を唱えた。感染防止の迷信がはやる。京阪神の三大市でも「お七留守」の張り紙が多い(感冒を「小姓風と命名し、その相手お七を持ち出した」)。十一月九日『東京日日』は「十一月一日より五日までにその死亡率は二十六プロセント、すなわち罹病者数の四分の一強にのぼった」、栗本衛生部長は「市民各自に充分の警戒を希望する」と述べた。

結び

菊池のインフルエンザ対策は、①既往症が有るので神経質なまでに注意した（家族を巻き込む）②マスク着用（*日本ではスペイン風邪を契機にマスクが広がった。）嗽、手洗いの励行③外出を控えた。④感染者の推移に注目した。

新型コロナウイルスの国内の感染者は四月三十日現在（第八波）、累計３３７４万人、死者７万４５７０人。一日当たりの感染者数のピークは、第一波７１８人、第七波２６万１９４３人に達した。マスク着用、ソーシャルディスタンスの確保、嗽・手指消毒などの「新しい生活様式」が徐々に定着した。テレワークに注目が集まり、働き方を再検討する機会となった。政府は感染拡大防止の為、小中学校に春休み迄の一斉休校を要請、東京都など七都府県に緊急事態宣言を発令した。課題として①入院病床の逼迫②発熱外来の不足③高齢者施設でのクラスター（感染集団）④検査体制の目詰まり⑤後遺症研究の遅れ⑥ワクチン開発の遅れなどが指摘されている。補助金の不正受給が様々に報じられた。

国を挙げてのコロナ禍対策が奏効をもたらせたが、日本社会に根付く同調圧力をクローズアップしたことに注意しなければならないと筒井清忠は警告する。対策を取らないと感染者八十五万人が重症化し、約四十万人が死亡する、という専門家の発言が国民の不安を増幅させた。一斉休校、アベノマスク、ワクチン困難など、国民の同調圧力を受けたポピュリズ

ム的（大衆の人気に基づく政治）政策もあった。日本国が国難に遭遇した時、大衆迎合の政治に靡き易い一面があることを示している。

＊　参考文献

磯田道史『感染症の日本史』文藝新書

『大正ニュース事典』第三巻〔大正六年ー大正七年〕毎日コミュニケージョンズ

『読売新聞』令和五年五月一日、「３年４か月　我慢と模索」

『読売新聞』令和五年五月十四日、「コロナと大衆社会」（筒井清忠「同調圧力　先鋭化する世論」）

閑話休題　川柳に読まれたコロナ禍　*令和二年一月十五日、国内初の感染者確認

武漢発コロナ恐怖身に迫る　　　　令和二年　三月　勲

GOTO で後ろめたさの京の旅　　　　　十二月　英明

早いものコロナコロナでもう師走　　　　　　　博信

コロナ禍で雇用の確保もう限度　　令和三年　二月　勲

コロナ禍で五輪の予算悲鳴上げ　　　　　　　　勲

引き籠り猛暑コロナに逆らわず　　　　　　八月　英明

コロナ禍を金の快挙が忘れさす　　　　　　　　博信

今回はモデルナと言う周り増え　　令和四年　三月　博信

第七波無いこと祈る新年度　　　　　　　四月　博信

オミクロン忍者もどきに姿変え　　　　　　五月　勲

他人事と思ったコロナ背負い込む　　　　　九月　英明

やれやれと思う間もなく第八波　　　　　十二月　博信

マスク屋が在庫処分に精を出す　　令和五年　三月　英明

二、「忠直卿行状記」（大正七年九月号『中央公論』発表）について

テーマ　**＊**世の中の権力者への忖度が生む悲劇。自分ファーストに起因する悲劇。疑心暗鬼の恐怖。**＊**松平忠直（文禄四年ー慶安三年）福井藩主。結城秀康（家康の二男）の嫡男。福井藩六十七万石は、前田百二十万石、島津七十二万石、伊達六十二万石などと並ぶ大藩である。

あらすじ

家康は越前勢が伊井藤堂両陣の後詰めを怠ったとして、福井藩・家老本多富正を厳しく叱責する。家康からねぎらいの言葉を期待していた忠直は、家老からの報告を受けて激高する。

「越前少将忠直卿は、二十一になつたばかりの大将であつた。父の秀康卿が慶長十二年閏四月に薨ぜられた時、僅か十三歳で、六十七万石の大封を継がれて以来、今迄此世の中に、自分の意志よりも、もつと強力な意志が存在して居る事を、全く知らない大将であつた。」（1

２４）忠直は家康の予想外の叱責に逆上する。「御先を所望してあつたを、許されもせいで」と、刀を振り回して「狂的に近い発作に囚われるのであつた。」。家老たちもこの癇癪が早く過ぎるのを待った（１２５）。

元和元年五月七日、大阪城の落城は時間の問題であった。家康は、愛子義直、頼宣を先手にするため（先手を務めることは名誉なこと）、全軍に軍を止まらせるように布令した。しかし、昨夜の興奮が治まらない忠直は軍令に従わず、三万に近い大軍で茶臼山に攻撃を開始した（１２７）。大将忠直は家臣の止めるのも聞かず馬上で指揮をとり、軍を進めた（１２８）。左衛門尉幸村を始め三千六百五十二級の首を挙げた。家臣が大阪城一番乗りを果たした。この日の功名は忠直の右に出るものはなかった。
「忠直卿は家臣等の奇蹟のような働きを思うと、夫が凡て自分の力、自分の意志の反映のように思われた。」。家康から受けた傷も消失したばかりでなく、自尊心は前よりも数倍強くなった。（１２９）家康はこういう忠直を褒め讃えた。「汝は又此度諸軍に優れし軍忠を現したこと、満足の至りじゃ。」と言って秘蔵の初花の茶入（注・現在は国宝）を与えた上で、忠直を「日本の樊噲」と褒めた（注・はんかい。中国史の英雄）。（１３１）天下の諸侯の何人よりも優れているという自信を持った。（１３３）「天下第一人と云つたような誇り」を持った（１３４）。

忠直は「家中の若武士と槍を合わし、剣を交え、彼等を散々に打ち負かすことに依つて、自分の誇りを養う日々の糧として居たのであつた。」（１３４）。
家中の槍術に優れたものを紅白に分け、槍術の大試合を催した。忠直は紅軍の大将として出場し、劣勢を挽回した。白軍の副将大島左太夫（家中無双）倒し、大将小野田右近と対した。二十合に近い烈しい戦いのすえ、右近は右肩を突かれ負けた。見物人は城の崩れるばかりに喝采した。慰労会の席で寵臣たちは、大阪の陣を引き合いに忠直に媚びた。酔った忠直は小姓一人を伴い庭に出た。小高い丘にある四阿（あずまや）で休憩した。（１３８）。暗がりで忠直がいるとも知らず、白軍の大将小野田右近と副大将大島左太夫が話ながら近づいて来た。左太夫が「殿の御腕前は？」と聞くと、右近は「以前ほど、勝をお譲り致すのに、骨が折れなくなつたわ」と答えた。忠直は此れを陰で聞いて、「生まれて初めて、土足を以て、頭上から踏み躙じられたような心持がした。」（１４０）。「右近の一言に依つて、彼は今まで自分が立つて居た人間として最高の脚台から、引きずり下ろされて地上へ投げ出されたような、名状し難いショックを受けた。」（１４１）忠直は煮えくり返るような怒りを覚えたが、反面で臣下から媚びられて得意になっていた自分に淋しさを感じた。大阪の戦場での勝利もなんだか怪しげなものに感じた。右近と左太夫に強い憎悪を感じた（１４３）。そればかりでなく「日本の樊噲と云う呼称さえ、何だか人を馬鹿にしたような、誇張を伴うて居るようにさえ思われ出した。」。

槍術の大試合を開き、忠直は紅軍の大将として劣勢を挽回した。副大将の左太夫と真槍真剣での試合を命じた。憎しみもあるが、自分の本当の腕前を知りたいとも思った。左太夫は昨日の立ち話に対する成敗だと思った。「彼は主君の真槍に貫かれて潔く死にたいと思つた」（１４８）左太夫は左の高股に槍を受けて倒れた。右近も昨日の罪を感じていたので、主君の長槍に貫かれて死のうと思った。忠直の槍に自分で故意に当たり、右の肩口を刺された。「忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴らした。が、夫は彼の心に、新しい淋しさを植え附けたに過ぎなかつた。」（１５０）左太夫、右近ともその夜に切腹して果てた。両名とも命を賭けて自分たちの嘘を守った。忠直は「自分と彼等との間には、虚偽の膜が、かかつている」。それを破ろうとしたが、家臣はそれを拒んだ（１５０）。

それ以来、忠直は武術の稽古は止め酒におぼれた。囲碁の相手をした老家老の一言に立腹して碁盤を足蹴にした。老家老は切腹した。「忠直卿の心には、家臣の一挙一動は、凡て一色にしか映らなくなつてゐた」（１５４）。忠直卿御乱心の噂が内外に広まった。
国老達の言う事も耳を貸さなくなった。越前一帯を襲った凶作に際しても、国老が歎願した「年貢米の一部免除」を理由もなく拒んだ。国政の乱れや忠直ご乱心の噂は柳営（幕府、将軍）に達した（１５６）。愛妾対しても「此女も自分に愛があると云ふ訳では、少しもないのだ」「妖艶な媚びは皆上部ばかりの技巧なのだ。」と忠直は考えた（１５７）。
「彼は今迄、人間同士の人情を少しも味わずに来た事に、此頃漸く気が附き始めた。」「人情の世界から一段高い処に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、索漠たる孤独を感じて居るのが、我が忠直卿であつた。」（１５８）『石の俎』の残虐行為は後世まで言い伝えられた。*妊婦の腹を裂いた言い伝え。但し、中国の故事とされる。
「忠直卿が、かかる残虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱いしないので、忠直卿の方でも、おしまいに臣下を人間扱いにしなくなつたのかもしれない。」

幕府によって忠直は改易となり、豊後（大分県）の国府内に配流された。後に同国津守に移されて（一万石）晩年を穏やかなうちに過ごした、享年五十六歳。

結び
「忠直卿行状記」（大正七年）は菊池の文壇的地位を確実にした作品である。大阪夏の陣で数々の戦功を挙げたが、家康からの恩賞が少なかった。これに不満として幕府に不満を持ったと言われ、乱行に及んだと言われる。絶世の美女・一国に溺れ酒宴の趣向として家臣や民を目前で殺害、ついには石の俎板の上で、妊婦の胎を裂く悲劇を起した。典型的な御家物「越前騒動」として広く講談や実録物などに定着していた。狂気の忠直卿、このイメージに斬新な解釈を持ち込み、巷間に広まっていた忠直卿のイメージを一新した。家臣の失言を切っ掛けに、これまでの自分が、阿諛追従の世界に生きていたのだという強い猜疑心に主人公は捉われ破滅してゆく。菊池は「多勢の中に交りながら、孤独地獄にも陥ちたらんが如き苦艱受

くる事屡々なりなど仰せられ、」の言葉を『忠直卿行状記』の一節を示した。但し、『忠直卿行状記』は菊池の創作。菊池は配流されてようやく人間性を回復する、という主人公の〈疎外と救済〉の物語として提示した。現代の「承認欲求」が引き起こした事件を重ねて見ると、菊池の提示した問題は今日的な意味を持つと言えよう。

3. 菊池寛の文学観

①「志賀直哉氏の作品」(『文章世界』大正七年十一月)
「氏の評言も観照も飽迄リアリスチィクである。がその二つを統括して居る氏の奥底の心は、飽迄ヒューマニスチックである。(中略) 自分は志賀氏の作品を読んだ時程、人間の愛すべきことを知つたことはない。(中略) 氏の懐いて居る道徳は「人間性の道徳」と自分は解して居る。がその内で氏の作品の中で、最も目につくものは正義に対する愛 (Love of justice) ではないかと思ふ。義しさ (ただしさ) である。人間的な「義しさ」である。」
*人間には間違いなく尊い善性があるということ、そうした人間の肯定的側面に光を当てることこそが、作家として、人間として自分の取るべき正しい道なのではないか、そのように菊池は覚醒した。片山宏行『菊池寛のうしろ影』未知谷。参照
②私は、芸術家を二分したいと思ふ。たゞ芸術的表現を念とする作家と、それ丈では満足し得ない作家との二種類である。(中略) 当代の読者階級が作品に求めてゐるものは、実に生活的価値である。道徳的価値である。(中略) 私の理想の作品と云えば、内容的価値と芸術的価値とを共有した作品である。(中略) 文芸は経国の大事、私はそんな風に考へたい。生活第一、芸術第二。「文芸作品の内容的価値」大正十二年七月『新潮』
③文芸は、高級な意味でも低級な意味でも娯楽である。よんで面白くない文芸などあり得ないと思ふ。　「文芸と娯楽」昭和七年一月『報知新聞』
④もう一つは、文士の社会的位地、国家的位地を、もつと高めるために、努力したいと思ひます。(中略) 先日ある所で、『文人武士国家所重』(中略) よく事の分かつたいゝ文句です。かうあつてほしいのです。かうあるべきが当然です。
「文芸家協会会長就任の挨拶」昭和十一年八月『雄辯』
⑤「文藝春秋」は、創刊当時は、自由主義の立場からプロレタリア文芸と抗争したが、その後も左傾せず右傾せず、常に良心を以て、編輯の方針としてゐる。(中略) 今後ともジャーナリズムの立場から、時勢時流の変遷にある程に順応して行くつもりであるが、根本精神は、中正な自由主義の立場にあつて、知識階級の良心を代表するつもりである。
「十五周年に際して」昭和十五年新年号『文藝春秋』
　*昭和初期にかけてプロレタリア文学は隆盛を極めた。寛はプロ文学が政治のプロパガンダに堕していると非難した。
*『文藝春秋』は大正十二年一月創刊であるが、新知識層 (サラリーマン、学校の先生など) をターゲットとした。大正リベラリズムの旗手であった。

以上